

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	フランス語に於ける否定表現について <一般>
Author(s)	村上, 勝也
Citation	広大言語 , 7 : 46 - 51
Issue Date	1967-12-18
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046271">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046271</a>
Right	
Relation	



# 「フランス語に於ける否定表現について」

村 上 勝 也

## § 1 否定詞の歴史

私の知っている限りの諸言語に於いて、その否定表現の歴史の変動を見ていると奇妙な一般性を示していることに気づく。すなわち、否定の副詞は強勢が弱いことが多いが、それが余りに弱く感じられるようになると、何か付加語によつて強められなければならなくなり、そしてこの付け足しが否定詞本体と感じられるようになるのである。しかしまたこの付加語も最初の語の場合と同じ経過をたどるのである。この弱まりと強めという作用と反作用を、ラテン語とその続きであるところのフランス語について概略を示すと次のようになる。

- (1) *ne dico.* (私は言わない)
- (2) *non dico.* (*non* < *ne-oenum*)
- (3) *Jeo ne di.* (*ne* < *non*)
- (4) *Je ne dis pas.* (*pas* はもともと<一步>の意味)
- (5) *Je dis pas.* (*ne* の消失)

さて、現代フランス語に於ける最も一般的な否定詞は上記の(4)に見られる *ne...pas* である。そしてこれを取りまくように *ne...point*, *ne...jamais*, *ne...guère*, *ne...nullement*, *ne...plus*, *ne...aucun*, *ne...personne*, *ne...rien*, *ne...nul*, *ne...ni...ni* etc. その他、これらの合成形 *ne...jamais personne*, *ne...plus rien*, etc. の否定形態が存在する。これらのうちまず *ne...pas* の歴史的展開を見てみよう。

## § 2 *ne...pas* とその類似的表現

まだ否定詞(*non*)が弱体化していないラテン語の時代に於いても、何らかの文体的価値を狙つて特徴的な語(普通小さな、無価値なものを示す)を付加することがあつた。例えば、

- *quinque dies aquam in os suum non coniecit,*  
*non micam, panis.* (ひとかけらさえも)
- *ne punctum quidem temporis oppugnatio respiravit.*  
(一瞬間さえも)

- ・ non licet transversum digitum discedere (指の幅ほども)

の如くである。そしてこの用法はそのまま古代フランス語に伝ったのである。これらの語は一般に動詞に後続し、元来は表現によつて変化した。例えば現代フランス語で示せば

Je ne mange mie.

Je ne vois point.

Je ne marche pas.

Je ne bois goutte.

etc. の如くである。これらのうち最も頻繁に用いられた mie, point, pas が一般化するのである。古代フランス語に於いては mie が最も愛好され、次いで15世紀頃から point と pas が頭角をあらわし、17世紀には point, 18世紀頃から pas が優勢となるのである。一方、このような現象と平行して ne による単独否定も17世紀頃まではかなりの数に於いて維持されるのであつて、最初にあげた(3)→(4)の移行過程に於いて mie, point, pas がどのような重要度をもつて否定観念の意識にあつたかを調べるのは今後の課題である。とにかく「ローランの歌」(推定1098-1100成立)には単独否定と合成否定が入り混つており(それ以前の例えば「聖アレクシス伝」(1040)には合成否定は見あたらない)、この頃から17, 18世紀に至るいわゆる中世フランス語の間に point, pas はその否定的意味を獲得していったことは事実である。(13世紀には ne のみによる否定と ne...pas による否定の比は9:1であつたが15世紀の終りではこの比が逆転している。)17世紀に於いては、pas, point のみによる否定が、(とりわけ直接疑問文や省略文に於いて)しばしば見られるのを考えれば、それが完全に否定詞として意識されていたことを証明している。

- ・ Fit-il pas mieux que de se plaindre ?
- ・ Avais-je pas raison ?
- ・ Et me demanderent si le roy tiendroit point  
pour l'enfant.
- ・ Tous les jours sont-ils pas à Dieu ?
- ・ M'y voici donc ? Point du tout.

しかしまた、ここまで見てきた限りでは、pas, point が破竹の勢で否定概念を得て、その後 ne を押しつけてしまうのではないと思われる程であるが現実には現代フランス文章語に於いては ne...pas, ne...point の形式が厳然として、確固たる位置を占めている。そしてもし作家が pas, point のみによる否定表現を使つたとしてもそれは破格とみなされ

るのが普通である。ここで一つ興味ある挿話を紹介しておこう。—— 17世紀に於けるこのような pas, point のみによる否定表現は、その当時の文法家（特に Vaugeras）達によつて非難され、アカデミーによつて反対された。そのため Corneille（彼は特に好んでこの用法を使つた）は、わざわざ一度書いた作品に修正を加えている。

- Marqué-t-il pas déjà sur qui tu dois régner ?
- Ne fait-il pas trop voir sur qui tu dois régner ?

しかしこれは直接疑問文あるいは平常文の場合であつて、省略文については現代フランス語に至るまで正常な発展をとげ、現在では慣用として完全に否定の用を足している。

- Pas d'argent.
- Pas de Suisse,
- Homme simple, pas orgueilleux.

さて一方、目を現代口語の方に転じてみよう。popular language に於いては、ne … pas 形式の ne はほとんど常に省略される。これは教養ある人々の間でもさかに行れるのである。

- J'ai pas su.
- Nous avons pas bu.
- Elles ont pas voulu.
- Dérangez-vous pas. (Ne vous déranger pas, vous の位置に注意)
- C'est pas vrai

また、Céline の Voyage au bout de la nuit (1932) に次のような文があるが、これは口語の反映であろう。

<Ma mère, je l'ai plus non plus……;  
Je veux que rien lui manque !  
Tu crois pas ?……;  
Y avait pas à chiquer. >

(rien, non plus についても後で述べるが平行した現象である)

こうして pas(point)の歴史的変遷を見て来ると、まず、ラテン語及び初期古代フランス語に於いては、単に文体的効果を狙つた、いわば気まぐれな付加語にすぎなかつたものが、ne と共に次第に規則的に出現するようになり、次いで否定表現には不可欠の要素になつたのである。その上、17, 18世紀に至つては、文法家の非難を蒙るほどに pas, point のみによる否

定形式が氾濫し、これは伏線をたどつて現代の口語に達しているように思える。17, 18世紀の口語の状態が明らかになれば、現代のそれと、またそれぞれの時代の文章語を比較してみるのもおもしろい。

### § 3 ne...aucun とその類似的表現

pas, point, etc. と同様に, aucun, personne, rien, jamais, guère etc. も、もともと肯定を意味するものである。しかしながらこれらの語もまた, pas (point) と平行した歴史的展開を遂げ、次第に否定的要素を帯びて来たのである。しかしこれらの語の肯定的要素と否定的要素は縦横に入り混じり、現代フランス語に於いてはあたかも袋小路の感を呈している。例えば、疑問文に於いては、これらは一応肯定の意味となる。

- ・ Est-il aucun réponse plus belle ?
- ・ A-t-on jamais vu pareille chose ?
- ・ Y a-t-il rien de plus beau ?

しかしこれらが全つたく肯定的であるとは言えない。というのは否定的ニュアンスがこの陳述の内部では嗅つているからである。また省略文ではこれらが絶対的否定をするのは, pas がその場合単独に使われるのと平行している。

- ・ Est-il venu quelquun ?      Personne.
- ・ Qu'a-t-il répondu ?      Rien.

なお上記した Céline の例 non plus, rien を参照すれば、普通の肯定文に於いても ne の脱落が可能であることがわかる。ここで rien を取り上げて考えてみると、その歴史的変遷の陰が反映しているように思われる。

- ・ Est-il rien de plus beau. ?      (肯定)
- ↓
- ・ Je n'ai rien dit.      (ne を伴う否定)
- ↓
- ・ Rien ne vient de rien      (単独否定)
- ↓
- ・ un rien, des riens (つまらぬもの, こと) (肯定)

### § 4 nul の歴史

上記した種々の否定形式のうちの ne...nul ne...nullement etc. に於ける nul だけは他のものと一応区別して考えてみる事が出来る。というのは、これらは nul < nullus < ne + ullus の如く、元来否定を意味したからである。したがつて現代フランス語を共時的に見れば、全つたく同等に扱われていても、その歴史は aucun, personne, rien, etc. と逆の発展をたどつたのではないかと推察できる。事実、非常に早い時期から nul も

ne によつて伴なわれ、aucun, personne, rien etc. との連想により、逆に肯定の意味を持つようになり、共時的には、それらと同じ用法が行なわれるようになったのである。しかしルネサンスの作家たちによるラティニズムによつて nul が単独に否定も意味する用法も行われたことは、言語変化の上からは余り重要でないとしても、心にとめておく必要があると思ふ。

#### § 5 ne……que について。

これは形は否定的であるが意味を制限するにすぎない。もともと ne……mais (plus) que の mais が落ちたもので選択否定である。ここで興味のあるのは、ne……que と、その否定形式である ne……pas que の歴史的変遷である、と言つてもこれは現代フランス語に於けるそれぞれの意味であり、17世紀以前には両者は全つたく同じことを意味したと言われている。そして18世紀になつて、文法家達の非難にもかかわらず、それぞれ意味が分化し、すなわち ne……pas que は ne……que の否定形式と意識されはじめ、そのまま現在に至つていのである。この推移を考えるに pas が否定的要素を帯びる過程を如実に語つていように思える。すなわち元来あつた ne……que に ne の弱体化に伴い pas を付加したのは今まで述べて来た一般原理であり、言語の慣用として、同一のことを意味する異形式として ne……que と ne……pas que が或る期間併存し、その後17、18世紀に至つて、pas の否定的要素が強まるにつれて、自ずとそれが ne……que の否定形式と意識されるようになったのであろう。言葉は文法家によつて動かされ得ない力をもっている。またこのような現象は現代口語に於いても起りかけている。すなわち

・ Je n' ai rien trouvé

の意味で上記したように popular language に於いては

・ J' ai pas rien trouvé

としばしば言われるのであるが、また別に、

・ Je n' ai pas rien trouvé

とも言われる。同様に

・ Je connais pas aucun homme.

・ Je ne connais pas aucun homme.

両者の競争が今後どうなるか問題である。

#### § 6 結 び

さて、いろいろとまとまりなく書いて来たが、興味深い点を私なりに述べてみると、まず、

現代に於ける文章語（小説など）と口語の否定表現の比較検討をしてみるとおもしろいように思える，がしかし日本に居ては現代口語の実状を知ることは困難だし，少々調べた限りでは，普通の作家（特に俗語を好んで使う作家を除く）には，ほとんどと言つてよいくらい pas のみによる否定形式は用いられていない。次に，16，17，18世紀あたりの否定表現の状態を見てみると，或る意味でその盛衰の epoch を示しているような気がする。ここを中心に pas, point, rien, jamais etc. 群と nul を比較対照しながらもつと詳しく調べてみるとおもしろいかも知れない。

— 了 —

## Datif Expletif

屋 敷 睦 美

私達は，フランス語の中でしばしば次の様な表現に出会うことがあるだろう。

- Regardez-moi ça. （ね、あれを見て！）
- Qu' on me l' egorge tout à l' heure !  
（ああ、たった今彼を殺したなんて！）
- Tu m' as l' air gaillard ce matin.  
（今朝は、ばかに元気そうじゃないか）
- Qu' on nous le pende !  
（ああ、彼を絞首刑にすとは！）
- Je te les ai fouettés de la bell façon !  
（私は相当なやり方で、彼等にムチ打ちの刑を与えてやつたんだぜ）
- Son petit nez vous a un air fripon.  
（彼の小さな鼻は、一くせありそうに見える）

このような表現に於ける moi, me, nous, te, vous などの第一および第二人称の間接補語代名詞は，関心を表す補語として虚辞的 (expletif) に用いられており，それ本来の働きに対して二次的なものであるが，ここに少しばかり紹介したいと思う。

それは，いわゆるラテン文法におけるシンタクスの中で，“Dativus ethicus” と称せられるものである。この datif は，最初に持っていたと考えられる文法的価値を消失してしまつたので，これがあるのとないのによつて生じる文中での差は大きなものではないと，い